



TITLE:

<今をとらえる> 私の研究遍歴

AUTHOR(S):

高山, 一夫

---

CITATION:

高山, 一夫. <今をとらえる> 私の研究遍歴. 資本と地域 2004, 1: 48-48

ISSUE DATE:

2004-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/66120>

RIGHT:

## &lt;今をとらえる&gt;

## 私の研究遍歴

高山 一夫

現代資本主義における医療問題を考察しようと思いい立って10年近くになりますが、恥かしながら、まだ研究がまとまっていません。体系的な構想力の涵養を痛感するこの頃です。

さて、研究の出発点は、合衆国における医療機関の営利化・企業化とそれを促した政策要因に関する修士論文でした。しかしこの研究では、そもそも非営利病院とは何であるのか、営利／非営利というのは単なる法人格ではないのか、といった論点に答えることができず、以後、非営利組織論や医療社会学、医療史などの分野にまたがって、勉強を続けています。博士論文では非営利病院の形成過程について若干の歴史的考察を行いました。が、地方政府の役割など未解決の論点もあって(例えば19世紀は公立病院も voluntary hospital に分類された)、分析精度の向上を試みています。対象地域を限定すると、医療業の消費立地型特性や非営利病院の理事会制度を捨象するわけにはいかず、人的・財政的・文化的側面から、病院と地域社会との関わりについて考察を迫られます。そこで、非営利病院分析を念頭に、スコット、パウエルら制度派組織論の翻訳作業も共同で進めています。

## &lt;学会参加記&gt;

## 環境社会学会第29回セミナーに参加して

柏尾 珠紀

2004年6月25日から29日にかけて滋賀県琵琶湖は守山にある琵琶湖リゾートクラブにおいて「環境社会学会」の第29回セミナーが開催された。この学会は1990年に鳥越皓之氏を中心に発足した環境社会学研究会が前身である。「現場から学ぶ」を合言葉に日本各地の環境問題の現場を訪問するという姿勢は現在もお維持されている。

学会は合宿形式で雰囲気もとにかくやわらかいように感じた。初日は交流会。二日目は、午前中に4つのコースに分かれてエクスカッションが催された。午後からは特別インタビューと称して嘉田由紀子氏(京都精華大学)、武村正義氏(元滋賀県知事)、吉良竜夫氏(琵琶湖研究所前所長)、鳥越皓之氏(筑波大学)らの対談が行われた。最終日は自由報告とシンポジウムが開催された。

最終日を中心に報告をしよう。自由論題報告は「技術」、「運動」、「意識、教育」の3つのテーマに分かれ

ところで、営利化・企業化という点に関わって、日本の医療政策は重大な問題を孕んでいます。90年代以降、相次ぐ患者負担と保険料引き上げの結果、財源別国民医療費に占める家計の負担割合が46%にも達し、他方で国庫負担が大幅に低下するなど、他国に見られない歪んだ負担構造になりました。とくに自営業者・高齢者の加入する市町村国民健康保険の負担が重く、450万世帯が保険料を滞納、事実上の無保険者である資格証明書発行世帯も25万世帯に達しています。その反面で、お金持ち専用の会員制医療機関が開設され、また「高度な医療」について株式会社病院の参入が認められるなど、所得水準に応じた医療の階層消費が現出しつつあります。命の沙汰も金次第、というわけです。

これはおかしい、というわけで、院生時代より各種の運動団体に出入りしてきました。今ではとある団体の理事も務めています。医療の場合は、素人は口を出すという雰囲気があるので、現場との密接な関係を意識的に保つ必要があるのですが、研究分野を問わず、ひとつ位は実践的なフィールド、ないし運動団体との関わりを持った方が、研究上の刺激になって良いかと思えます。岡田研究室の皆さんには釈迦に説法、かもしれません。

最後になりましたが、『資本と地域』の発行をお慶び申し上げます。

(福井大学)

て報告がなされた。これらのテーマからもわかるように、報告者は学部や領域はもちろんのこと、職種も超える多彩さである。例えば、情報環境デザイン(株)社員、特定非営利活動法人、琵琶湖ラムサール研究会員などなどという方々であった。午後からのシンポジウムは「地域のシナリオをどのように生み出すのか」というテーマのもとで、「自然の再生というシナリオ」と「地域の豊かさというシナリオ」の二つを軸に各4〜5名の報告のあと討論が行われた。着眼点や概念規定のみならずタイムスパンにいたるまで全く異なる各人の報告は、それぞれの「環境」世界を描いており、それなりに納得いくものであった。

「地域」を考えるときに「地域とは、どこから始めてもどこへでもつながるものであり、自分の身体(五感)が行き渡っているものである」という主張はなかなか魅力的なもののように思われる。ここからも環境社会学の守備範囲の広さを実感した学会参加であった。環境社会学のこだわりである「現場主義」という日常性を、今後いかにして表面的な現象記述から理論化し社会科学としていくのかは興味があり期待もしたい。

(奈良女子大学大学院)